

---

**プロデューサーK**

とくとく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プロデューサーK

### 【Nコード】

N9732H

### 【作者名】

とくとく

### 【あらすじ】

間宮和馬は、とんでもない母、姉、妹に恵まれて？いた。皆男勝り、男心を容赦なく粉砕してきた節がある強者だ。そこに常識人（本人談）間宮和馬は隙間を探して暮らしているのだが、そこに土足で踏み込む妹の間宮桜。その日から、和馬改めプロデューサーKによる妹プロデュー스가始まってしまう。

## プロデューズ・スタート

間宮和馬こと俺は、高校3年生の大切な休日を、読書というとても有意義な時間にあてて、素晴らしい日曜を満喫している。

4月、季節は春。ぽかぽか陽気が何とも心地よい。ここは俺の部屋でインドアなわけだが、窓から差し込む日差しが気持ちいい。

そんな俺のプライベートな空間に、図々しくも乗り込んでくる輩がいた。そいつはいきなりノックも無しに部屋のドアを開け放った。最近妙に化粧などにこり始めた俺の妹である間宮桜。

「私、お淑やかになる！」

「あつ、それ無理。つてぎゃあー！」

いきなりベッドに寝転び読書中の俺に飛び乗り、首筋にかみつく。残念だが、いきなり兄にかみつく妹のことを、お淑やかな女性とは言わないんだ。

「どうしたらいいの？」

「知るかつどけ！」

怒鳴ってはみるが聞く耳無し、俺の腹の上に座り込んでぴくりとも動こうとしない。結構苦しいんだが……

つか、俺に聞くなよ。男に聞くな。

「姉貴に聞けよ」

「それじゃ無理」

そこは冷静に判断できているらしい。

うちには姉が一人、妹が一人いる。どちらも容姿では申し分ないと俺が言うからには間違いない。しかし、性格の方は男勝りというか、まあそつだな。全てにおいて男に勝って豪快だ。

だから彼氏が出来ない、というわけではないのは少し前に知った。うちの姉が告られているのを俺は目撃したわけだ。だがその返事が「うん、ありがとう！　ずっと友達だよー！」だった。

姉の卒業式の日だったのだ。男から好きですと言われて、それをなぜ愛の告白だと理解できないのか……

「そう、あの姉貴に聞いても無駄なんだ。つまりお前も同じく無駄なんだ」

「そこを何とかするのが、おにいの仕事でしょうが」

ホントこの妹はどうなってるんだろうな。ぶっちゃけ兄のことをどう思っているんだ？

…… おおゝ怖くて聞けるか！

「俺の仕事つてなあ……なんなら母さんに聞けよ」

「それマジで言ってるの？」

「スマン、姉貴より質悪いな」

母さんは半端無い。無敵のアンチエイジングを心得ている。まあ

心の方だがな、精神年齢は俺と同じ18で止まったと言っても過言ではない。母さんが結婚したのが18だったっけな、今は関係ないが。

「お前さあ、彼氏とかいるの？」

「いないよ、いるわけないじゃん」

ちよつと安心してしまふ。全国のお兄様そうだろ？ 大事な妹に彼氏が出来た、やったあーって祝福するか？ まだ中学2年なんだからぞ。

「でもお淑やかになりたいってのは、ようするに彼氏がほしいって事だろ？」

「まあそうなる」

別に止めようなんて思いやしないよ？ ただまあどこの誰とも知れない馬の骨に、桜を好き勝手にされるのはちよい困るわけだ。最終こいつのやることに口は出さないけどな。

「はあー……」

「おにいそのため息なに？」

「なんでもない。じゃあ俺はどうすればいい？」

「私を鍛えてください！」

そう言われてもなあ。化粧なんか知らないし、服も流行りとか知

らないし。そもそもなんで俺が妹の彼氏作りなんぞに手を貸さねばならんのだ……

「でもなんの力にもなれねえぞ」

「いいよ、おにいありがと」

俺って優しい兄貴……思い上がりか。

しかし……外では異性にどう接しているのか知らんが、その笑顔で心揺れん男がいるのか？ いやいない、それは断じていない。と、兄の俺が言うのだから間違いはない。

「お前は学校では男子とどう接してるんだ？」

「普通だよ、でも鬱陶しいやつが多いのよね……いらんことばかりしてくる」

それは好意の裏返し、だと思っぞ。まさか本気で鬱陶しがっているとは。

「それは多分、そいつはお前のことが「鬱陶しいから、思いっきり殴ってやったら話しかけてこなくなった」

——うわぁー……

お淑やかな女性か。遠い道になりそうだな。

好意に全く気付かないばかりか、素直になれん中二男子の心をへし折るような残虐さを持っている。流石は母さんの娘で姉貴の妹だ。

「まあ……気長にな、少しずつ変わっていこうぜ」

「うん！ おにい、いや違うなあ……」

俺は兄だぞ？

「プロデューサー……和馬だから……K！ うん格好いい。よろしくプロデューサーK！」

なんだそりゃ、プロデューサーって。

「いや、呼び方は普通でいいだろ」

「なんでー？ あつもしかしておにいって呼ばれたい感じ？」

「ごふっ！ そ、そんなわけねえだろ！」

思いつきりむせた……ちくしょう、なんてこと言いやがる。このリアクションは俺がシスコンみたいじゃねえか！ 断じて違うぞ！ 兄が言うのだから間違いない。

「そう？ じゃあよろしくプロデューサーK！」

桜は元気よく俺の部屋を飛び出していった。何がそこまであいつのテンションを上げているんだ？ どのどいつがあいつをお淑やかにさせようとしているんだ？

どうだろうと面倒な話だ……

ちなにみその呼び方は嫌なんだが……

こんな姉です

……結局、俺はプロデューサーKになってしまった。一体あの妹の何をプロデュースしろというのか。まあ退屈しのぎくらいにはなるだろう、俺は今進学とかについて本格的に考え始めるため、忙しいのだが。

とりあえず読書に戻ろう、そう思い俺は本を再び手に取るが、妹よりも凶悪な輩が、俺のプライベートプレイスに乗り込んできた。

「なんか、桜のテンション超高いんだけど」

「……」

俺は手に持った本をアピールする。俺の空間に入ってくるなど。だがその意図に気付いてか気付かないでか、俺のベッドまで進入してくる。姉貴である間宮楓だ。勉強も出来て、容姿端麗、弟の俺が言うからには間違いない、美人だ。進学を勧められたらしいが、現在ダラダラしている。

空手、合気道の有段者。テニスとバスケットが超上手い。そして最近近所の中坊捕まえて、野球をしたりしているという噂がある。

俺はもう一度本を、今度は姉貴の顔の近くに持っていく。こっちに來るな、と。

「邪魔」

姉貴は俺の抵抗を無視、本を掴み部屋の隅に投げつけた。迷惑なやつだ……

「……はあー。何しに来たの姉貴」

「報告」

「いらねえよ」

「報告を」

「……」

「報告をした」

「俺がプロデュースするんだよ」

めんどくさいやつだ、理由が知りたいなら始めからそう言え  
いい。だいたい俺は言いたくなかったんだよ。恥ずかしい。

だが俺が黙り込んだら黙り込んだで、最終理不尽な暴力に襲わ  
れるのは経験として分かっている。はあ、なんだろうな、この家の力  
関係は。

「なんの？」

「……お淑やかになりたいだつてさ」

「そりゃ無理でしょ？ 和馬にたのんでどうすんのさ」

「姉貴よりはマシだと……いつてえー!!」

このバカ姉貴……男の急所を……なんて容赦のない。

にやにやしやがって、弟いじめて何が楽しいんだよ。

「それはそうと、私も手伝おうか？」

「いら……ねえよ……むしろ邪魔……」

「ハッキリ喋りなさいよ、声が小さすぎる」

誰のせいだ！

この痛みが女に分かってたまるかよ。まあ分からないから気安く殴ってくるんだろうけど。男同士なら絶対にやらねえよ、シャレにならないから。

「いらねえつつつたんだよ……！」

「へえ、久しぶりにうちと殺りあうと？」

「うつ嘘だ嘘！」

だからシャレにならないって！

「ふーん、あ。時間だわ」

「なんの？」

「野球」

あの噂は本当だったのか、さほどたいしたことでもなかったけど。とにかくこのバカ姉貴を野球に誘っていた中坊には感謝だな。

春のぽかぽか陽気、姉貴の頭は年中ぽかぽかしているようだが、俺にもぽかぽかでリラックスの一時がほしいものだ。

桜はどこに行ったか知らないが、お淑やかになるため色々やってるし、バカ姉貴は野球。これでやっと俺はリラックスできるわけだ。願わくばこの平穏が一秒でも長く……

「おい、カズ」

母さん！ 俺の平穏を返してくれよ！ 普段は夜勤だからこの時間寝てるつてのに、なんでこんな時だけ俺の部屋に来るんだよ！ 絶対寝ぼけてるだろ……

「母さん、部屋で寝ようか」

「カズと寝る」

「はいはい」

毎晩酒を飲んでるから、足下がおぼつかないようだ。仕方がないから、俺が担いで部屋まで連れて行く。

あー酒臭いなあ……アル中にならないか心配だ。いや、なってるのかなあこれ。

母さんの部屋は匂いが半端無い。香水か何かの匂いがえげつないほどにする。鼻が曲がりそうだ。まあ酒臭さは消えるけど。

「酒は控えるよ」

「飲んでないよ」

よくそんなこと言う……

しかし、これで俺の読書を邪魔するやつはいなくなった。  
もう一度部屋に戻り、バカ姉貴に放り投げられた本の続きを読む  
こととしよう。

俺の部屋の隅っこに、ちょっと折れてしまった本が。別にコレク  
ションするわけでもないから、気にもならないけどちょっと腹が立  
つな。

まあいい、ベッドに寝転び読み始めよう。

「全く、厄日だなあ……」

ちなみにこのつぶやきはほぼ毎日のことだ。日常が厄日なんだな  
あ……

カキーン、と快音が聞こえた。テレビからの音声でもラジオから  
の音声でもない、どうも外から、それも結構近い場所から聞こえて  
きたようだ。

耳を澄ませば声が聞こえる。

「ここで代打、楓！」

姉貴どこで野球やってるの！？　つか窓から見えるし、家の前の  
道路じゃねえか！　グラウンドでやれて、それかせめて広い場所に  
行けよ！

ピッチャーは、なんか見るからに野球部の中学生。打たすなよホ  
ント。

俺の願いは聞き入れられず、見事な姉貴のバッティングセンスで打球は打ち返され、飛んできたのは俺の部屋……じゃなくて知らん人の家の窓へ。ガシャーンと目を瞑りたくなる音が響いた。

「姉貴なにやってんの!？」

「おおー和馬、見てた？ 私のホームラン！」

「じゃねえよ！ 謝ってこい！」

「お願い！」

「ああ？」

なんのお願いだよ、まさか俺にボール取って来いつてことかよ。どこのジャイアンだこのバカ姉貴。絶対いかねえよ。だいたいそんなにこにこ笑顔で頼まれて、誰が願いを聞き入れるんだよ。

「和馬っちお姉さんは大事にしろよー」

「うつせえガキ！ なんで俺に対してタメ語なんだよ！」

最近のガキンちよは年上を敬わないな。全く。これもあのバカ姉貴の影響だろうなあ……あいつのせいで俺の立場はどんどん悪くなっていく。

「早く行ってこいよこのシスコン」

「よーしガキ。そこを動くなよ」

禁句を言ってくれたよこのガキンちょ。俺はシスコンじゃねえかな。妹も姉も、美人だがめちゃくちゃすぎる。残念だが姉に至っては畏怖の対象でもある。

俺は金属バットを肩に担いで玄関を開け放つ。姉もガキどもも居やがらねえ、俺に恐れをなして逃げたか。姉が逃げた理由は分かんが。

とりあえず素振りでもしてみるか……

「おい、お前だろ家にボール打ち込んだの」

「は？」

俺の肩を掴む敵ついおっさん。はて、なんのことだろう？

家の前の道路には、バットを担いだ俺が1人。野球をしていたメンツは1人残らず逃げ去った後だ。

——はめられた、姉の策略か……？ 恐ろしい……

「俺じゃねえぞ？」

「犯人はいつだってそう言うのさ」

あんた刑事かなんか？

「いや、状況見たらそうかも知れねえけど、違っからな」

「犯人はなんとか言い逃れようとするのさ。だから俺は一切きく

耳持たんぞ」

なるほど、あの禁句で俺が降りてくることも、姉の計算だったか……

連れてかれた……

俺の必死の説得で漸く分かってくれた、あのおっさん実は良い奴かも。しかしその時には日が暮れ始めて読書は出来なかった。

今日始まったことではないが、とんでもない姉だ。

## その場の勢いだった

見渡す限り、青い空。なんと俺の下まで空だ。体が軽いぜ、きつ  
とここは天国なんだ。

天国に音楽が流れ始めた。聞き覚えのある、俺の好きな曲。  
俺のポケットから振動、それに気付いたとき俺は青空の中を一気  
に落ちていった。

「うわっ！ いでっ！」

とまあ、樂園から追い出されて現実に引き戻された俺はベッドか  
ら落ちていた。分かってたけどな、夢だつてことには気付いてた。  
でももうちょっと長くあの世界に居たってよかったんだ。誰だよ俺  
をこっちに引き戻した奴は！

ケータイの背面ディスプレイにはトベの表示。俺のダチのト部遊<sup>うた</sup>  
太。ちなみにトベはこいつのあだ名というか、初対面でたまに言わ  
れる間違った読み方のことだ。

かくいう俺もそうだったのだが、それを貫き通して俺だけはあい  
つをトベとしてしか認めていない。まあトベって呼ぶのは恥ずかし  
いから呼び方は普通だけだな。

「もしもしー、つか死ね」

『はあ？　なんで朝っぱらからそんな物騒なこと言われないとい  
けないんだよ。そんなんだったら切るぞ』

「切れ」

『今暇ー？』

なんで切らないんだよ、つか今日月曜だから俺は学校なんだよ。

『忘れてた、お前学生だったな』

「分かったら今すぐ働け」

トベと俺は結構仲良しと言えるが、つき合い自体は凄く短い。出会ったのは高校二年の終わりくらいだった。ちよつと都会の方の街で、俺がクラスメートと深夜にぶらついていたら、作業服姿の金髪の変な奴が、3人くらいの大男に囲まれていた。そいつこそがトベことト部遊太だったわけだ。

とりあえず助けようぜー、ってことになって、クラスメートと一緒に大男を追い払ってみた。するとトベは一気に元気になって俺たちについて来た。

それが始まりで、なぜこの短期間でこんなに仲が深まったのかわからないが、あの時のメンバーで今もトベと連絡を取り合うのは俺だけだ。馬が合う奴だったということなのだろう。

『はあー俺だってティーンエイジャーだぜ？』

「知ってる。じゃあ彼女でも作れよ」

『簡単に言うな、紹介してくれよお』

「我が姉でも紹介しようか？」

『えっ！？ お姉さん居たの？ もっと早く言つてよー！』

意外と食いついてきた。だがしかしうちの姉は容姿端麗、そして文武両道、男勝りというか男らしい面すらも持っている、パーフェクト姉だ。バカ姉貴だな。

それに対して、トベは別に細工でもないが、とりわけ格好いいわけでもない。金髪、バカで中卒でほとんど就職しようとも思っていない。へたれで弱い。それでいて喧嘩っ早く、調子に乗りやすい。ダメな男だ。

「忘れろ、切るぜ」

『待つて！ 待つておくれ旦那！』

「悪いがお前とじゃ釣り合わん」

『なんだつて！ …… まさかお前姉が離れていくのが怖いのか？ ちょ、待て！ なんかミシミシ聞こえるんだけど！』

おつと危ない、うっかり携帯に力を込めてしまっていた。残念だが、姉は既に俺から遙か遠い世界を生きている。家には居るけどな。

「それに姉貴は昼間は外で遊んでる割合が高いからな。お前みたいなバカはそもそも眼中に入らんと思うから気にするな」

つーか姉貴は彼氏とかいねえのかなあ……いるのに近所のガキんちよと野球もねえか。

「おにい、ご飯」

「おーいト部。悪いが妹が呼んでるから切るな」

『なに？ 妹も居たのか……？』

「それ犯罪だからな」

通話終了、うっかりディスプレイにひびが入るところだった。現在時刻は朝の7時。俺は高校に、妹は中学に行かないといけないからこんな時間になる。

姉貴も母さんも起きない、父さんはそもそも家にいない。

ご飯は毎日妹が作ってくれるし、家事は姉貴もいつの間にかやってくれてたりするから、実質困る事もねえけど、家には親が居るのかたまに疑問になる。

だが銀行にはちゃんと父さんからお金が入ってくるし、母さんが寝てるのも夜働いているからだから仕方がないといえば仕方がない。

俺が中学に上がってすぐくらいで、父さんはいろんな場所を仕事で飛び回るようになり、母さんは夜勤。それから姉貴と桜がずっとこうやって家事全般をしてきた。

こんな環境で、なんの役にもたたない長男がいる。難儀なことだ、俺には何も出来ない。

「おにい頼んだよ」

「ん？ なんだっけ」

「プロデュース！」

憶えていたけどすっかり忘れようとしていたぜ、だが桜の方が憶

えているのでは意味がない。

早起きして、朝食を作り、笑顔で兄を迎えるこの桜に、足りていないものはなんだろう。

「……お淑やか、俺にはお前はお淑やかに見えるがなあ」

「ほんと？」

「まあ、お淑やかな定義が曖昧なんだけどな」

「じゃあ見に来てよ」

「見に来てって……無理だろ」

桜の通う私立菅原中学は、俺の母校でもある。別に校内に入っても問題はないのだが、今日は平日で俺も学校があるから、高校に行かないわけにはいかない。

それに生徒で埋め尽くされる中学校に、如何に母校とはいえ平然と入っていくのは不可能だ。

「でも制服捨ててないでしょ？」

「捨ててねーが……って着させる気か！？ 無理だよ！」

「でも身長伸びてないから大丈夫」

「うるせーほっとけ」

確かに背は伸びてねーけど、体重だけ増えたけどさ。今さら中学の時の制服なんて着て、しかも母校に戻るか。恥ずかしい。

電話だ、俺のケータイの背面ディスプレイにはまたもトベ。

「ああ？」

『今から行ってもいいか？』

「いやいや、俺学校行くからな」

「えー？」

ちよつと桜黙っててくれ。人差し指を立ててその意を伝えてみる。伝わったようだが、桜は頬をふくらまして椅子にどっかり座り込んだ。

『すぐ着くから』

「すぐ帰れよ？」

「おう！『おう！』」

電話より先に声が聞こえてきた……どこからだ、って考えるまでもない。ずかずかとリビングまで上がって来やがった。トベのやろ、既に家の前だったのかよ！

「なんで家の前にいたんだよ」

「いや、玄関に座ってたぜ」

「なお悪いわ！」

まあまあとトベは笑う。ぶっ飛ばすぞこのやろ。勝手に入って来やがって。

「そんなことよりい、妹さん？　可愛いねー、俺とどっか楽しいところでも」

決まった、こいつぶっ飛ばす。誰に断って人の妹を目の前で口説いてんだよ、第一それは犯罪だと電話でいったよな？

「いーじゃん、奢るからさあぐあっ！」

トベの胸ぐらを掴み上げて、桜から離れた位置で壁に叩きつける。そして桜には聞こえないようにこの男に忠告しておこう。

「……殺すぞ」

「冗談だ冗談！　俺ロリコンじゃねえし……」

本当に冗談なのか、怪しいものだ。もし手を出しやがったら、筋肉バスターを、東京タワーのてっぺんから喰らわしてやる。それやったら俺も死んじゃうな。

「本題だけど、俺が間宮の代わりに高校行ってやるから、間宮は妹さんの方行ってこいよ。玄関から聞いてたからだいたい事情分かってる」

「へえ」

とりあえず顔面にパンチ。

「いてえ！」

「バカだろテメエ、鏡見て言え。それからなに盗み聞きしてんだよ」

この際盗み聞きの方はパンチで許すけど、俺とトベの顔は全く似てない。こいつはガキンちよみたいな顔だし、まず金髪だ。背丈が近いくらいしか似てるところは無い。

「黒彩はあるし、顔さえ隠せばいけるだろ」

「校内で顔隠すバカがどこにいるんだよ」

「マスク」

……まあ、出来なくはなさそうだけど、俺はそもそも行く気無いし。それに俺の一日をこのバカに託すと思うと……ちよつとそれは無理だ。

俺のイメージを破壊しかねない。いや、絶対破壊しやがる。

「おにい、それいける！　お願いしようよ！」

「バカお前、そんなのダメだ」

「えー、プロデュースしてくれるんじゃないの？」

それはすると言ったけど……

「へえー、間宮は」

「なんだよ」

「中坊にビビってんの？」

なわけねーだろうが。俺が中坊なんかには引けを取るわけがない。それに1度やると言ったことを、やらないで逃げるのはどうもスツキリしない。こうなったらやってやるうじゃねーか……

「行つてやるよ」

「いいの？ やった」

「……夢の、俺の夢の女子高生とのうはっはが」

「いらんことしたら殺すからな」

ト部に念を押しておいて、俺の中学校生活が始まりを告げた……

## 潜入1：実質変質者

鏡に映るのは、数年前の俺の姿そのものだった。俺の中学の時の教師と顔を合わせたら、まずばれるだろうな。

卒業アルバムと見比べても、俺の顔変わってないな……

しかし学ランを今さら着るのも、なんかコスプレみたいで恥ずかしいな。

「へっへっへ」

俺の横には俺の制服を着た気色の悪い男トベがいる。髪を黒く染めて、マスクをしているが、どう見ても俺には見えないのは俺が俺だからか？

「マジでいらんことしたら、アイルキルユー！」

トベののど仏に親指を突き刺し言う。

少しバックして、トベは満面の笑みで俺の方に向き直った。

「ノープロBLEMさ！」

「信用ならん……」

まあ俺は高校に行けないわけだから、今さら不安に思うだけ無駄だけど。トベを信用するなんて不可能だ。つか、中卒の男がいきなり数3なんて出来るのか……？

俺一応理系で、国立狙いなんだけど。

「お前、ホント大丈夫なのか？」

「だから、ノープロブレム！」

「8かける8は？」

「88！」

こいつは小学校にも行っていないのか？

「おにい行こうよ」

「はあー、しょうがない」

鞆まで中学の時のものだ、多少傷とかが目立つがたいしたことはない。一応高校三年にまでなっているのに、案外中学生に自分でも見えてしまうのが悲しいな。身長も170くらいだし、細マッチョ体型だからな。

「クラスとかどうする？」

「はあ？ 俺が中学の授業なんか出てどうするんだよ」

「学生は授業でないとダメなんですよー」

知ってるよそれくらい、俺は中学三年間で教わることは、二年くらい前に既に終わってるんだよ。というよりも籍がないだろ。

「とりあえず授業中は、屋上とかでダラダラしてることにする」

「あつこ立ち入り禁止だよ」

「知ってる。俺はその卒業生だからな」

だからこそ入り方も知っているわけだ。懐かしい、思い返してみればあの屋上で過ごした時間はかなり長い。午後からの授業は大抵あそこだ。

俺の武勇伝も数多く残されているはず。

「じゃなくて入れないよ。工事してるもん」

「は？ なんの工事？」

「工事というか色々修理というか、壊れてたり落書きが多いから全部直すんだって」

壊したり落書きって……それめっちゃ心当たりある。つーか俺がやったのも含まれるだろうな。

……あれ消されちまうのか。貯水タンクにがんばって書いたあれが。

「なぜかでっかくおにいの名前が書いてあるんだって」

ああ、書いたの俺だから。大変だったぜ。

真っ黒のスプレーで、三個並んだ貯水タンク全部に俺の名前をでっかく残したからな。

「なんであんなことしたの？」

「中学の時、俺は若かったんだよ」

色々やり過ぎたから、今さら中学の先生とは会いたくないんだけどな……まあ感謝はしてるが。

「まあいいや。行こうか」

懐かしの通学路を、妹と一緒に歩いて行く、とバレバレなので。俺は学校までの道を全力で走り抜ける。原チャリで行くわけには行かないので、自転車で一気に学校まで。

五分弱でつく。なんと中学の時のベストタイムを塗り替えることが出来たぜ。校門には、懐かしい生活指導の大隈がいる。この名前を思い出すのも久しぶりだ。

「ちつす」

「おお、間宮……？ おはよう」

あぶねー、いきなりばれるところだった。大隈に敬語を使わないのは、後にも先にも俺だけだったか。まさかいきなり俺の名前が出るとは……

さてと、自転車は適当にその辺に止めて、体育館の前を通って職員用入り口から校舎に侵入と行くか。確かここはこの学校の不良が集まってるはず、なんだけど誰もいやしない。もうヤンキーなんてはやらねえか。時代は変わるな。

「あれ？ お前なにやってんだ？」

やっぱり変わらないものがあるみたいだ。よく考えれば、俺は優等生と同じ時間に登校してきたのだから、ヤンキーが溜まっていな

いのも当然だ。

そして、金髪ロン毛でカチューシャをしてるこのバカ面が、ヤンキー生徒の本日の第一号か。

「見たこと無いな、三年か？」

「単純計算だと六年かな」

俺は高校三年なんで。つか、その緑色の校章はてめえ二年じゃねえか。三年と間違えてても俺は先輩だろ。

「誰っすか？」

「間宮」

「！ 桜さんのお兄さんですか！？」

こいつ桜の知り合いか？ まさか桜の好きな……いやいや、こんなバカ面に限ってそんなことはないか。

「……そうだけど」

「マジですか！ 桜さんってぶっちゃけどんなプレゼントを喜んでくれますか？」

「しらねーよ、気持ちだろプレゼントは」

「！ そ、そうですね！ いやー桜さんのお兄さんとなると言うことが違うなー」

露骨にうぜーなこいつ。そんなほめ方されても嬉しくもなんともねーよ。というか俺が桜の兄だと知った瞬間から態度が変わりすぎだ。

「お兄さん！」

「誰がお兄さんだ、テメエの兄貴になった憶えはない。気持ち悪いからやめろ」

「そんなお兄さん！」

「次言ったらしめるぞ。もういい、俺は校舎に入る」

俺には桜の様子を見て、まあなにするのか知らんけどプロデュースする指名がある。お前みたいなアホに構っている時間はない。

……大丈夫、目立ってないな。

「お兄さん」

「なんでついて来てんだよ！ あとその呼び方やめろ！」

職員用出口から、アホを蹴り出す。いくら普通の中学生装つても、あんな目立つ金髪についてこられたら目立つ。それにアホの相手は怠い。

さて、校舎に入れたは良いが、ここからどうすればいいだろうか。俺は授業を受けるわけにはいけないから、教室以外のどこかにいることになるが、目的は桜のプロデュースということで近くにいる必要があるな。

「おい、アホ。お前何組だ？」

「二組です！ お兄さん！」

確か桜も二組。いつそのことこいつと入れ替わってみるのもありだな。

「お前授業サボれ」

「え？ いやですよ」

なんでだよ、お前見るからに授業なんて怠いっていうタイプじゃねえか。実は結構真面目な生徒なのか？

「しょうがねえ、アホ。ちょっと来い」

「……お兄さん、そのアホって呼ぶのやめてもらえませんか？」

「じゃあお兄さんと呼ぶのをやめろ」

「じゃあ、はい……間宮さんで。俺は岬風太」

「よし、プウ太」

職員用出入り口のすぐ横にある階段、そしてその階段の下には倉庫になっている部屋がある。そこは大掃除等でしか開かない秘密の部屋であることと、実は鍵がかけられないことを、卒業生の俺は知っている。

とりあえずプウ太をそこに押し込む。

「いやいや、俺風太でぐあっ！」

「寝てろ」

フルパワーで鳩尾を殴ってやった。これで多分一日はほっといても起きないだろう。まあ帰りにはちゃんと起こしてやるし、単位はお前より取れるから任せとけ。

後は教師に俺がプウ太でないことがばれなければいい。

とりあえず、そうだな。演劇部の部室でも行ってみるか。

我が校の演劇部は、廃部になったそうだが。しかし道具等は全てそのまま。残念なことに鍵がかかっていたが、マスターキーを拝借してきたので問題ない。

「さてと、何があるかなあ」

金髪のカツラ、ハゲカツラ。王冠、なんかの怪物のマスク、そして覆面……

色々あるな、確実に顔を隠せて、まあかつこわるいのは嫌だな。

そして、最高の品を見つけた。カラフルな色使いの、どこかの民族的な感じのお面。完璧だ、当初の目立たないは完全に無理だが、顔全体を覆うこれならば、俺の正体はばれない。

何より格好いい！

すっぱり被って演劇部の部室を俺は出た。そこで第一目撃者に出会った。

「……なにしてるの？」

「おっと見つかつちまったか」

「風紀を乱す輩は殺す。一見うちの制服を着ているようだけど、その型は少し前のものだ。お前誰だ？」

どういう観察力だよ、つか制服に型とかあったのか？ ぱっと見じゃ区別つかねえぞ？

「……謎の怪人Kだ」

我ながら最悪のネーミング。自分で謎のって言うてしまってるし、怪しさ全開だな。

「……そうか、変質者はここで俺が殺すよ」

堅そうな仮面ではなく、視界が狭まって見えにくい体の下の方を狙って蹴りを入れてきた。俺が見てきた中では結構な速さだ。こいつ風紀とかいいながら絶対喧嘩しまくってるよ。

でも全然避けられる。

回転して裏拳を打ち込む、直撃して生徒は地面に膝をついた。

「強い……」

よし、チャンス逃げよう！

そいつの居ない方へと俺は走り抜けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9732h/>

---

プロデューサーK

2010年10月12日05時13分発行